

心の

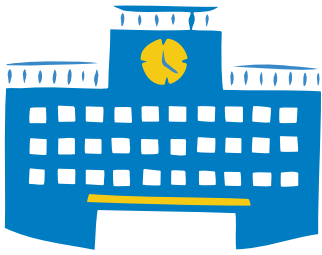


家庭、学校、地域への

教育への

メッセージ

実践



前田 好一 編著

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

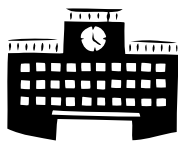
操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。



家庭、学校、地域へのメッセージ



心の教育への実践

前田好一編著

はじめに

戦後、わが国は新しい教育理念に基づく教育制度をスタートさせ、50年が経過して今日に至っています。この間、経済の成長、交通・情報・通信システムの急速な整備など、さまざまな分野における進展は、わが国の社会を著しく変貌させました。そして、生活水準は向上し、便利な生活が送れるようになりました。

しかし、そのために、人々の生活はかえってゆとりを失い、慌ただしいものになってきたことも否めません。家庭もそのありようを変え、地域社会もかつての地縁的な結びつきや連帯意識を弱めてしまいました。

このような社会全体の大きな変化は、子どもたちの教育環境も大きく変えています。

まず、生活様式の変化などを背景に、子どもたちの体格は大いに向上しました。また、高い学歴志向に支えられて、高校・大学への進学率は急激に上昇し、子どもたちの教育の機会は著しく普及しました。しかし、そのために過度の受験競争、受験の低年齢化という問題も発生しています。

都市化・過疎化の進行や核家族化などに伴い、子どもたちの人間関係や生活体験、子どもたちを取り巻く家庭や地域社会においても、さまざまな教育上の課題が指摘されています。さらに学校では、いじめ、学級崩壊、不登校問題などが顕著になり、中学生による暴行・殺人事件などがマスコミに取り上げられています。

私たちは、“物の豊かさ”から“心のゆとりと豊かさ”を求めることに発想を転換していかねばなりません。このことが“21世紀の教育を考える原点”であると考え、「変えよう！心を癒し、育てる教育へ」という心の叫びを、本の形にすることにしました。

著者代表 前田好一

目次

はじめに	3
I 今、なぜ教育を変えねばならないのか	渡利正義 7
1. 子どもたちの現状	
2. 家庭や地域社会の現状	
3. いじめ・学級崩壊・不登校	
4. 過度の受験競争	
II これからの教育はどうあるべきか	渡利正義 23
1. 家庭教育のあり方——“感性”を育てる	
2. 学校教育のあり方——“学ぶ力”を育てる	
3. 地域教育のあり方——“生きる力”を育てる	
III “生きる力”の基本は“感性(心)”——“心”を育てる実践例	
前田好一・絹野重治	41
1. 心の教育の基礎づくり	
2. 『三つ子の魂百まで』	
3. お父さんとお母さん、一緒に子育てを！	
IV 現場の教師の実践例	69
1. “共感する心”を育てる学級指導	渡利正義・前田好一 70
2. “やる気”を育てる授業実践	渡利正義・太田雄一・前田好一 72
3. 「命をかけてるんだ！ お前に」生徒指導例	石戸大機 81
4. ある泣き虫校長の詩集「心に響け、語り詩」	石戸大機 113
あとがき	127

I

今、なぜ教育を変えねばならないのか



渡利 正義

1. 子どもたちの現状

ゆとりのない生活

現在の子どもたちは、かつての子どもたちでは考えられないような物質的豊かさや便利さの中で生活しています。

一方で、学校での授業や課外活動、塾や自宅での勉強にかなりの時間がとられ、睡眠時間も必ずしも十分でないなど、「ゆとり」のない生活を送っています。

NHKの世論調査で「夜眠れない」「疲れやすい」「朝、食欲がない」「なんとなく大声を出したくなる」「なんでもないのにイライラする」といったストレスをもっている子どもが多いことが報告されています。

よく遊ぶ友達

(1) 学校が終わってからよく遊ぶ友達の状況を見ると、「同じクラスの子」が62.6%と最も多く、「違うクラスの子」41.2%、「クラブや部活で一緒の子」31.6%となっています。

学年別にみると、各学年とも「同じクラスの子」の割合が多くなっているが、小学生では「家の近所の子」が小学5年34.0%、小学6年28.8%と多くなっており、中学生では「クラブや部活動で一緒の子」が中学1年46.1%、中学2年48.0%、中学3年30.9%と多くなっています。

(2) 一緒に遊ぶ友達の人数をみると、「2～3人」が32.8%と最も多くなっています。

性別にみても、男子「2～3人」が29.3%、女子「2～3人」が36.3%と最も多くなっています。

テレビやビデオを見たり、テレビゲームで遊ぶ時間

学校が終わってからテレビやビデオを見たり、テレビゲームで遊ぶ時間をみると、「2時間～3時間」が30.1%と最も多く、「3時間以上」29.7%、「1時間～2時間未満」28.5%となっています。「ほとんどない」と「1時間

以内」の合計が11.2%となっており、8割以上の児童が1時間以上、テレビやビデオを見たり、テレビゲームで遊んでいます。

学習塾に通う状況を見ると

学習塾に通う状況を見ると、42.9%が学習塾に通っており、学年が高くなるにつれて行っている割合が高く、中学3年生では51.4%が学習塾に通っています。

学習塾に行っている理由をみると、「行かないと勉強ができなくなるから」が33.5%、「希望する学校へ行きたいから」が27.2%、「親から行くように言われたから」が18.3%となっています。

学年別にみると、小学生から中学2年では「行かないと勉強ができなくなるから」が最も高く、中学3年では「希望する学校へ行きたいから」が最も高くなっています。

生活行動の経験

児童の日常生活の中で思いやりのある行動や社会的自立にかかわる行動についての経験と、落ち込んだり、いじめをしてしまったり、いじめられたり、学校へ行かなかったりした経験が「よくある」「たまにある」「まったくない」の3つから選んでもらいました。

(ア)「犬、ネコ、小鳥などの世話をしたこと」については、全体では「よくある」が40.8%、「まったくない」が19.9%であり、女子のほうが「よくある」と答えた者が多く、学年差はあまりありません。

(イ)「困っている人を助けてあげたこと」については、「よくある」「まったくない」ともに10%台であり、「たまにある」と答えた者が7割でした。

(ウ)「自分で決めたこと（スポーツや勉強など）をやり遂げ、よくやったなど今でもうれしく思うこと」は「よくある」が32.5%、「たまにある」が54.5%、「まったくない」が11.5%でした。男女差がほとんどなく、学年差にはばらつきがあるが、特に傾向はみられませんでした。

(エ)「両親と離れて、一人で親戚や友達などの家に泊まったこと」につい

では、「よくある」が18.6%、「たまにある」が51.2%、「まったくない」が28.9%であり、女子のほうがやや経験が多いようです。学年差はあまりありません。

(オ)「赤ちゃんをあやしたり、小さな子の面倒をみたりしたこと」については、「よくある」が29.0%、「たまにある」が45.9%、「まったくない」が28.9%です。女子のほうが「よくある」と答えた者がやや多く、年齢が高くなるにつれて割合は低下していきます。

大切なことと思うもの

大切なことと思うものの状況をみると、「友達がたくさんいること」が66.3%と最も多く、「健康であること」が60.4%、「将来に夢をもっていること」が41.7%となっています。

性別にみると、男子では、「将来に夢をもっていること」44.3%（女子39.2%）、「運動や歌などで、何か得意なもの（特技）があること」33.0%（女子28.9%）などが高く、女子では「友達がたくさんいること」が71.6%（男子60.9%）、「勇気をもっていること」が41.0%（男子32.5%）と高い割合となっています。

また、学年別では「健康であること」「友達がたくさんいること」が学年が高くなるにつれ割合が減少し、「将来に夢をもっていること」は上昇しています。

困っている人に出会ったときの対応

(1)「電車やバスに乗っていて、自分が座っている席の近くに、お年寄りや体の不自由な人が立っていた」ときの対応をみると、「声をかけて、席をゆずる」が53.4%と最も多くなっており、特に女子では57.5%（男子49.3%）と高い割合を示しています。

また学年別では、中学3年生で4割と低くなっています。

(2)「遊園地で迷子を見かけた」ときの対応をみると、「自分の家族や係の人のところへ連れていく」が42.4%と最も多くなっており、女子では49.4%

(男子35.4%)と高くなっています。

また男子では、「知らないふりで、通りすぎる」が18.1%（女子10.0%）と女子に比べて高くなっています。

(3)「クラスの誰かがほかの子をいじめているのを見た」ときの対応をみると、「友達に相談する」が35.5%、「先生に知らせる」23.9%となっています。

性別にみると、男子では「やめろ！　と言って、とめようとする」が24.8%（女子15.5%）と女子に比べ多く、女子では「友達に相談する」が45.8%（男子25.3%）と男子に比べ多くなっています。

学年別にみると、小学生では「先生に知らせる」、中学生では「友達に相談する」割合が多くなっています。

しあわせ感

しあわせ感についての状況をみると、「ややしあわせだと思う」が33.3%と最も多くなっており、「とてもしあわせだと思う」の32.1%と合計すると6割以上が「しあわせ」であると答えています。

性別にみると、「とてもしあわせだと思う」は女子が34.3%（男子29.9%）と、男子に比べて高くなっています。学年別にみると、学年が高くなるにつれて「とてもしあわせだと思う」は減少する傾向にあり、「ややしあわせだと思う」や「どちらともいえない」の割合が高くなっています。

現在、児童がもっている不安や悩みの状況をみると、5割以上の児童で、何らかの不安や悩みを抱えており、特に女子では6割以上となっています。

内容をみると、「自分の勉強や進路について」が72.9%と最も多く、「自分の顔や体形について」が42.6%、「自分の友達について」が39.5%となっています。

学年別にみると、学年が高くなるにつれて不安や悩みをもつ割合が多くなっているが、特に「自分の勉強や進路について」は、中学3年で約9割の児童が、不安や悩みをもっています。

参考文献 厚生労働省「平成13年11月20日調査」

(平成15年1月29日発表)

小学校の子どもたちの現状について

(休憩時の職員室の先輩教師と後輩教師の会話の中から)

先輩 「最近の若いもんは……」という言葉があるが、僕が学生の頃は「時代が違うんだよ！」などと思い、気にもとめていなかった言葉だ。時代も21世紀になり、夢と希望に満ちあふれた時代を期待していたが、ニュースを見れば毎日のように暗い事件があふれている。遠い地での戦争も、とても無視できない大変な事件だが、未成年の犯罪も毎日のように聞こえてくるね。

後輩 僕の学生時代とは明らかに違います。僕はつね日頃そう思っていました。もちろん、それは自分の時代を正当化しているだけかもしれませんが。自分のことを客観的に見れていないだけなのかもしれません。正直、僕の時代と現代の小学生についてどこが違うのか気になっていました。

先輩 最近の小学生はかわいくなったね。たとえば足の速い男の子（5年生）がいたとする。その生徒が50m走でいい成績を出したとする。「お前、足速いなー！」と言ったとする。

後輩 今の小学生の場合、「エヘヘ」とすっごくうれしそうに、にっこり笑ったりしてかわいいですね。僕の時代の小学生の場合、「はっ？先生そんなことも知らなかったの？僕はこのクラスで一番足が速いんだけど」なんて、かわいくなかったですね。

先輩 昔の子は皮肉のひとつも言えた。そうやって自分の気持ちや自分の存在を表現する言葉を知っていたんだ。

後輩 でも、今の子は本当にうれしそうに笑って喜ぶんですよ。うれしそうに笑って照れるのは悪いことではありません。

先輩 でも、それは幼稚園児や小学校でも低学年の反応だ。今の高学年児は皮肉を言うことを知らず、素直に喜ぶ。いつまでも子どものままなん

だな。心が成長せず、いつまでも幼稚なままなんだ。精神年齢が実年齢にとどかない。

後輩 なぜ、そうなってしまったんでしょう。

先輩 少なくとも僕の時代の子どもは、自分の得意な部分を主張し、自分という存在をアピールした。やりたくないことがあったら、やりたくない意思表示をした。自分がやりたいことには一生懸命取り組んだ。友達と悪さをしながらも、良いこと、悪いことを学びながら少しずつ大人になっていった。もちろん、そうではない子どももいたが、それでも自分の考えをもって行動していた。

今の子どもはそうしない。親の言うことを聞き、先生の言うことを聞き、自分がしたくないことがあってもがまんしてやる。やりたくないことがあってもがまんするからストレスがたまり、いつか爆発する。まるで幼稚園児のように奇声を上げ、泣きじゃくる。感情が爆発して自分で自分が制御できなくなる。それは、自分の意思を相手に伝える手段を知らずに育ってしまったからなんだ。自分の存在を相手に伝える手段を知らずに育ったということだね。

後輩 なぜ、そのようになってしまったんでしょう。

先輩 最近の親たちは、子どものくせに子どもを産み、育てるからか？ それとも幼稚園、小学校ともに先生の質が落ちたからか？ あるいは、不況、不況とわめくだけで何も変わらない世の中が悪いのか？

後輩 僕にはわかりません。でも、今の子どもたちが正常に育っていないことは確かですね。先日、僕が同居している兄夫婦に子どもが生まれました。とてもちっちゃな手で僕の指を一生懸命つかむ姿を見ると、勉強ができなくてもいいから、優しい子どもに育ててほしいと、親でもないのに思ってしまう。僕の幼稚園からの親友夫婦には、今1歳の男の子がいます。昔のあるCMじゃないけど、わんぱくでもいい、たくましく育ててほしい、と素直に思います。

僕もいつかは結婚して子どもをもちたいと思っています。生まれてくるだろう自分の子どもは、五体満足に育ってくればそれでいいと

思うでしょう。たぶん。

もうひとつ、子どもたちにお願ひがあります。しゃらくさい子どもに育ってもらいたいです。自分の意思、意見に従って、それに合わないことに対しては意地でも反抗するような、しゃらくさい子どもになってほしいですね。

もう一つお願ひ。もしも自分の間違いに気づいたら、素直に謝れる子どもに育ってください。そしたら、きっと素敵な大人になれるよ。もう、かっこよすぎ。ほかには何もありません。僕は、子どもを立派に育てられる大人になれるのかな？

2. 家庭や地域社会の現状

家庭の状況

平成5年の内閣府の世論調査では、家庭の教育力が低下していると思う点として、「基本的な生活習慣が身に付いていない」が最も多く挙げられ、ついで、「過保護、甘やかせすぎな親の増加」、「しつけや教育に無関心な親の増加」が指摘されています。

親が子どもと過ごす時間、特に父親が子育てにかかわる時間について、日本は3%で、ドイツ(18%)、アメリカ(34%)など、諸外国に比べて特に少ないことが指摘されていました。

しかし、別の調査では、「10年前に比べて、家庭を重視する男性が増えている」と感じている人の割合が72.4%に達し、また20歳代から30歳代の人々の80%以上は、「今後、男性が子育てや、教育などに参加して家庭生活を充実し、家庭と仕事の両立を図るためには、企業や仕事中心のライフスタイルを変えるほうがよい」と答え、仕事中心から家庭や子育てを大切にする生活へと意識が変わってきていることを物語っています。

地域社会の現状

地域社会では、都市化の進行と過疎化の進行により、地域社会の連帯感が希薄化していることなどから、地縁的な地域社会の教育力は低下する傾向にあると考えられます。

平成5年の内閣府の世論調査によると、“自分と地域の子どもののかかわり”の経験は次のようでした。

「道で会ったとき声をかけた」	36.3%
「危険なことをしていたので、注意した」	35.8%
「悪いことをしたので注意したり、叱ったりした」	28.3%
「特にない」	29.9%

しかしながら、平成6年の文部科学省の調査では、「子どもの健全な成長のために地域の大人たちが積極的に子どもにかかわっていくべきだと思う」

「どちらかといえばかかわったほうがよい」という回答の合計が89.3%に上り、保護者の意識の上では、地域社会が子どもたちの成長にかかわっていくべきであると考えていることが証明されています。

また、平成2年の内閣府の世論調査では、子ども会活動への参加、スポーツなどの指導、社会福祉活動など、いわゆる社会参加活動については、「参加している、参加したことがある」と答えている人が増えていることを示しており、特にボランティア活動に対しては、地域社会の人々の参加意欲が高まっていることが示されています。

これからの社会の展望

戦後、わが国は、廃墟の中から欧米諸国に追いつき追い越すべく努力してきた結果、驚異的な経済成長を遂げ、世界経済の中でも大きな地位を占めるようになり、国民所得の水準の面でも世界のトップレベルに達しました。

しかし、その一方でさまざまな問題が生じています。過疎化や都市化が進行し、企業中心の行動様式が社会に定着する中で、地域社会の連帯感が次第に希薄化してきました。また、核家族化が進み、家族のありようも大きく変化してきています。

経済成長を追い求め追い続けてきた結果、いつも何かに追い立てられているような余裕のない生活を送ってきてはいないでしょうか。豊かさを実現したといっても、物の豊かさが中心で、あふれるものに囲まれながら、なにかしら満たされぬ思いが募る毎日を送ってきたのではないのでしょうか。

私たちは、“物の豊かさ”から、“心の豊かさ”を求めることに発想を転換して生きていかなければなりません。このことが、“21世紀の教育を考える原点”です。

参考文献 『学校五日制で教育はどう変わるか』 高階玲治他著 教育出版

厚生労働省ホームページ『児童環境調査』

3. いじめ・学級崩壊・不登校

学習環境破壊の現状

学習環境破壊とは、一部の問題行動をとる子どもの授業妨害や、それに同調して、すべての子どもが勝手な行動をして、学級の学習環境が壊れる状況などを意味します。たとえば次のような状況が挙げられます。

- ・子どもたちが教師の指導・助言を無視したり、反抗したりして指導や助言を受け付けない。
- ・子ども同士の私語を教師がやめさせるように注意しても、それを無視して、授業中に私語が絶えないで、教師の話が子どもにとどかない。
- ・子どもが授業中などに、突然大声を出したり、怒鳴ったり、ものを教師に投げつけたりする。
- ・子どもが授業中に、勝手に教室内を歩き回ったり、教室の外に出ていたりして学習をしない。

問題行動をとる子どもの背景として考えられること

〈子ども自身の問題〉

善悪の判断などのモラルや道徳心、思いやり、忍耐力などが身に付いていない。社会性が未発達で、コミュニケーション能力が低く、人間関係がうまく築けない。

〈家庭のあり方の問題〉

基本的な生活習慣や社会におけるマナー、善悪の判断などの倫理観や思いやりなど、本来家庭において子どもに身に付けさせるべきことがきちんとしつけられていない。

〈学校のあり方の問題〉

基本的な指導体制が十分に機能していないこと、形式や秩序を重んじる形の生徒指導が行なわれ、一人一人の子どもについての理解が十分でない。

〈社会の状況の問題〉

子どもの規範意識の低下は、そもそも大人のモラルが低下し、規範意識が

ルーズになっていることが原因。地域社会での人間関係が希薄になって、子ども同士の遊びなどが少ない。インターネットやマスコミなどのメディアを通して、過激な暴力や性の表現など教育的に有害な情報が氾濫している。

いじめ・学級崩壊・不登校対策

問題行動の個々のケースで対応の仕方が異なりますが、一般論として次の対策が考えられます。

学校においては、根本的方策として、子ども一人一人を大切に、その子どもたちが自分自身の存在感や自己実現の喜びを実感できるように、教師が学校運営の基本を確実に共通理解しておくことです。

どの学校にも、いじめがあり、不登校が起こり得るという基本認識が必要です。子どもの発する危険信号を鋭敏に捉え、どんな些細なことでも、親身に相談に応じるなどして、その発見に努め、不幸にして問題が発生した場合、学級担任ひとりが悩みを抱え込まずに、全職員が手を携え、一丸となってその解決に取り組むべきです。

教育相談体制を充実し、教師以外の専門家の協力を求めることも大切なことです。

家庭においては、言うまでもなく、親子の温かい人間関係を通して基本的な倫理観を養い、生活態度のしつけを行なう役割を担っていることを再認識し、教育力を高める対策を講じるため、学校・家庭で相談し合うことが必要です。

いじめ、不登校の問題の解決に当たっては、学校が全力を挙げて取り組むことはもとより重要なことですが、学校のみで解決することに固執しない“開かれた学校運営”が大事なことだと思います。

これらの問題に取り組むためには、まず子どもたちの生活にとって、学校というものが、時間的にも、心理的にも、家庭や地域社会に比べて、きわめて大きな存在になっている現状を見直すことが重要であると考えられます。

学校週五日制で学校のスリム化を図り、学校・家庭・地域社会のバランスを改善するとともに、学校外での多彩な生活や体験の場をもつことは、いじ

めをなくし、不登校を解消する“教育正常化”のための対策になることと思います。

子どもの耐性を育てる

問題解決に当たっては、子どもの“耐性”を育てることが基本です。子どもは、自分自身で学習（活動）課題を決めたり、また教師から与えられたりすると、その解決・克服のために全力投球します。そのとき、子どもたちは多くの場合、全力でチャレンジしなければ乗り越えられない“カベ”にぶつかります。その“カベ”（課題指示）とは、たとえば、「静かに問題を考える」「教科書を読む」「じっとすわっている」など各教科の内容であったり、特別活動などの小集団の活動であったりします。

この場合、子どもの立場から考えると、楽をしたい気持ちや怠けたい気持ちなどの“人間的弱さ”を乗り越えて、自らの問題や課題（カベ）に向かって努力しなければなりません。すなわち、“人間的弱さ”に負けない“耐性”をより強いものにしていかなければなりません。

この“耐性”は、子どもが日常生活の中で身近な課題を一つ一つ乗り越え、解決していくことの繰り返しによって、より強いものにしていかなければなりません。

それゆえ、子どもが自分の人間的弱さに負けて安易な行動をとって、課題解決から逃げようとするときは、教師は、子どもが逃げないように制止したり、禁止したり、叱ったりします。それでも、子どもが集団の学習環境を崩壊させるような場合には、その子どもをそこから退去させて、個別に指導する場でアプローチします。

教師が与える教育内容は、子どもが努力すれば克服できる課題を与えるべきであって、子どもが全力投球しても、乗り越えられないほどの大きいもの、難しいものであれば、むしろそれを与えた教師が責められるべきです

参考文献 『教育改革と「21世紀・日本の教育」読本：子供の教育環境を守る』坂本昇一著

4. 過度の受験競争

進む高学歴社会化

わが国における義務教育後の中等教育への進学率は、世界最高の水準を示し高学歴社会化がますます進んでいます。

日本：フルタイム（全日制への進学者）93.9%

パートタイム（定時制・通信制本科への進学者を含める）
97.3%（2002年）。

アメリカ：ハイスクール（公立）における第9学年から第10学年への進学率 88.6%（1999年）。

イギリス：公私立中等学校及び継続教育機関（非高等教育課程）の該当年度はじめにおける16歳在学者86.0%（1999年）。

フランス：パートタイム在学者は見習い技能者養成センターの16歳在学者を含め96.8%（1999年）。

ドイツ：83.3%（全日制普通教育・職業教育学校在学者）（1999年）であり、パートタイム在学者（定時制職業教育学校の在学者）を含めると97.6%（1999年）と高い。

（平成15年1月20日、生涯学習政策局調査企画課）

わが国の義務教育後の中等教育への進学率は世界最高の水準であり、高学歴社会化が進んでいます。しかし、公立校では生徒の退学が依然多く、その理由の主なものは、「進路変更」「学校生活・学業不適應」です。

一流企業にさえ入れば生涯安定した生活が得られるという神話が崩壊しているにもかかわらず、特に、私立中学校受験熱が首都圏を中心に過熱するばかりで、塾通いの低学年化の現象が顕著になってきています。

子どもたちに“ゆとり”を確保し、“生きる力”を育てていく教育改革がスタートしたものの“過度の受験競争”が教育改革の前に大きな障害として横たわっています。

「よい学校で、よい教育を受けよう、受けさせよう」と奔走する気持ちはわかりますが、受験競争や塾通いという競争によって、子どもの生活が捻じ曲げられ、ゆがみが生じていることを、多くの人々は認めていながらも、ただ大河に流されているような状況ではないでしょうか。

北海道教育委員会は受験競争の低年齢化をくい止める方法を検討し、中高一貫教育導入の方針を打ち出していますが、家庭、学校、地域も意識転換をして、このたびの教育改革の目指している“生きる力”を育てるために、密接な連携を取り合って実践することが何よりも大切なことです。

Ⅱ

これからの教育はどうあるべきか



渡利 正義

1. 家庭教育のあり方——“感性”を育てる

家庭教育は、“生きる力”の基本となる基礎的資質や能力を育成する場であり、すべての教育の出発点です。

(1) 家庭の責任——しつけを行ない、感情や情操を育てること

基本的な生活習慣や生活能力の習得、豊かな情操の形成、他人に対する思いやりや善悪の判断などの基本的倫理観、自制心や自立心を身に付けるなど、“生きる力”の基本となる基礎的な資質や能力を育成することは、乳幼児期における親子のきずなの形成に始まる家族とのふれあいを通じて、親子の愛情を基盤にした家庭教育においてのみ可能なものです。

過度の受験競争に伴い、家庭でも受験のための勉強重視の傾向があり、日常の生活におけるしつけや、感性・情操の涵養など、本来、家庭教育の役割であると考えられるものまで、学校にゆだねようとする傾向にあることが指摘されています。

加えて、近年の都市化、核家族化等により、地縁的つながりの中で子育ての知恵を得る機会が乏しくなり、さらに個人重視の風潮、テレビなどマスメディアの影響などにより、大人も子どもも価値観が大きく変わり、親の家庭教育に関する考え方にも変化が生じ、無責任な放任、過保護・過干渉がみられるなど、家庭の教育力の低下が指摘されています。

子どもの教育や人格形成に対し、最終的な責任を負うのは家庭であり、子どもの教育に対する責任を自覚し、家庭が本来果たすべき役割を見つめ直していく必要があることを訴えたいと思います。

親は、子どもの教育を学校に任せるのではなく、これからの社会に生きる子どもにとって、何が重要で、どのような資質・能力を身に付けていけばよいか、考え直していかなければなりません。

そして、社会全体で“ゆとり”を確保する中、家庭では親と子、さらには、祖父母との家族団らんの中で、愛情をもってふれあいながら、子どもに豊かな人間性を育むため、ときには子どもに厳しく接し、自制心や自立心を

もたせ、同時に家族全員が家庭における自らの役割を見出し、主体的に役割を担う家庭づくりを進めるべきです。

(2) 父親も子育てを！ さらに地域の大人とともに活動を！

父親と母親と一緒に、PTA活動、ボランティア活動、地域のさまざまな行事などに参加し、それらを通じて得た経験や、人々とのつながりを家庭教育に生かすことが重要であり、さらに、育児の経験者としてさまざまな知恵をもっている祖父母が孫の教育に参加していくことも、一層重要なことです。

(3) 家庭教育の充実の具体的な方策

① 家庭教育に関する学習機会の充実

子どもたちの“生きる力”を育むためには、子どもの成長のそれぞれの段階に応じた、親としての教育的配慮が必要です。

そのための学習内容としては、他人を思いやる心や感性など豊かな人間性や自制心、自立心などを育てる家庭教育のあり方を学ぶこと、子どもとのコミュニケーションの図り方、子どもの発達段階に応じて身に付けるべき基本的な生活習慣や、家庭や地域社会で経験することが望ましい自然体験、社会体験、生活体験などが挙げられます。

少子化の中で、これから親になる青年を対象に、意識啓発を行ない、保育ボランティアを通じて育児体験の機会を与えるなど、人生の早い時期から子育てに関する情報を提供する必要があると考えます。また、経験豊かな祖父母を交えて、子どもの生活や教育についての考え方、近年の家庭・家族の変化、教育の動きなどについて学習し合う機会を設けることも考えられます。

② 子育て支援ネットワークづくりの推進

核家族化や女性の社会進出が進む中で、子育てに関して不安や負担を感じる親が増大していることから、子育てについて相談相手となる子育て支援グループの育成や支援態勢の整備を進め、情報提供の充実を図ることなどが必

要です。

③親子の共同体験の充実

親と子どもが同じ体験をもつことは、親のものの見方を子どもが知るとともに、子どもの考え方を親が知ることにもなり、双方の理解を深め、場合によっては同じ価値観を共有する上で非常に有効であり、親子のきずなが一層深まるきっかけになることが期待できます。

④父親の家庭教育参加の支援・促進

これまで必ずしも十分に果たされなかった父親の家庭教育における役割の重要性を再認識し、父親の家庭教育への参加を促す機会を設けることなどが必要です。

家庭教育においては、子どもだけでなく、社会全体が、時間的にも心理的にも“ゆとり”をもつこと、学校でも家庭でも地域社会でも教員や親や地域の大人が“ゆとり”をもって子どもと過ごすことによって、子どもの成長をしっかりと見守ることができるのです。こうした“ゆとり”はもちろん時間的なことだけではありません。同時に心の“ゆとり”の確保も重要なことです。心のゆとりこそが、21世紀の教育改革の成功へのキーワードと言えるでしょう。

2. 学校教育のあり方——“学ぶ力”を育てる

(1) “生きる力”について

① “生きる力”をどう捉えるか

“生きる力”を“人間として意味深く生きる力”であると捉え、“生きる力”として必要な“学力”を学校教育の場で育むためには、“生きようとする力”（生きる目標）、“生かす力”（自己改革）、“共に生きる力”（自己実現）の3つを総合的に育てていくことが大切であると考えます。

なお、この捉え方は文部科学省が示す、「自ら考え、主体的に判断し・行動する能力」「自らを律しつつ他人を思いやる心などの豊かな人間性」と同義であると考えています。

“学力”という場合、学んだ成果としての“学力”と、学ぶ力としての“学力”とがあり、双方が必要ですが、現在学校教育に特に求められているのは、学ぶ力としての“学力”です。

② “生きる力”を育てるために何が必要か

中央教育審議会の第1次答申では、“生きる力”として、次の3つの力を挙げています。

「自ら生きる力」……自分さがしの旅、自立心・自己抑制力・自己責任や自助の精神、個性尊重、などの言葉に表現される力

「共に生きる力」……他者との共生、異質なものへの寛容、他人を思いやる心や優しさ、ボランティア、社会貢献の精神、などの言葉で表現される力

「豊かに生きる力」……あふれる情報の中から、自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力、理性的な判断力や合理的な精神、美しいものや自然に感動する心、柔らかな感性、わが国の文化や伝統を尊重する態度、などの言葉で表現される力

しかし、個性尊重を旗印に育っているはずの若者たちも、実は逆に「みんなと同じでいたい」という心性をもっているようで、興味・関心、生活パターン等の全般にわたって若者たちは同一化してきています。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

〈著者プロフィール〉

前田 好一（まえだ よしかず）

- 1926年 北海道八雲町生まれ、道立八雲中5卒
早稲田大学文学部教育学科中退 法政大学文学部史学科卒
- 1954年 日高村千栄中を振り出しに平取中、賀張中、長万部中
- 1966年 八雲鉦山中、知内中教頭
- 1969年 松前町立大島中校長昇任、その後尻岸内町立東光中、大中山中、古武井小歴
任
- 1987年 定年退職、その後七飯町生涯学習アドバイザー、総合福祉相談員（七飯町町
内会連合会事務局長）の業務に就く

太田 雄一（おおた ゆういち）

- 1930年 北海道砂原町生まれ、道立函館高卒、北海道大学水産学部卒
- 1958年 砂原中を振り出しに尻岸内中教諭
- 1973年 双葉中、峠下中、吉岡中、古武井小教頭
- 1985年 野田生中、松前中校長歴任
- 1991年 定年退職後、国際協力事業団より日本語指導教師として南米ボリビアに派遣
される
- 1993年 任期満了後帰国、現在社交ダンス指導員として活躍中

渡利 正義（わたり まさよし）

- 1964年 北海道学芸大学函館分校卒、亀田小を振り出しに北海道教育大学附属函館小、
古武井小
- 1983年 道教育庁宗谷、渡島教育局指導主事
- 1988年 釧路、網走教育局指導班主査
- 1991年 釧路、渡島教育局生涯課長歴任
- 1996年 桔梗小、深掘小校長
函館市校長会長、北海道小学校長会副会長
- 2001年 北海道通信社函館支社参与として現在にいたる

絹野 重治 (きぬの しげはる)

1942年 函館市生まれ

1964年 北海道学芸大学函館分校卒

八雲町立八雲鉦山中、函館市立常磐小、西小、高丘小、北海道教育大学附属小を歴任

1993年 千代田小教頭、北海道教育大学附属小副校長

1997年 函館市立石崎小、神山小、深掘小校長、函館市小学校校長会副会長、道小学校理科研究会函館支部長、函館ソフトバレーボール連盟会長
現在、深掘児童館館長

石戸 大機 (いしど たいき)

1945年 函館市生まれ

1967年 北海道教育大学函館分校卒

留萌市立港南中を振り出しに尻岸内町立東光中、函館市立亀尾中、北中、赤川中教諭を歴任

1992年 函館市立新川中、宇賀の浦中、赤川中教頭を歴任

1996年 函館市立蛾膚野小中、北中、桐花中校長を歴任

2002年 函館市立深掘中校長として現在にいたる

函館市中学校長会 事務局長、北海道中学校長会理事
現在、函館市中学校長会会長

心の教育への実践 ——家庭、学校、地域へのメッセージ——

2004年11月15日 電子出版発行

編著者 前田 好一

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Yoshikazu Maeda 2004 Corded in Japan

ISBN4-8355-7985-2 C0037

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)

新 04.10.25 Y.H.